

[COMMUNION]

WEB:http://www.nskk.org/

tokyo/index.html

E-mail:comm.tko@nskkn.org

PHONE:03-3433-0987

FAX:03-3433-8678

Diocese Office



《シリーズ・宣教協議会の提言から その③》
ディアコニア

―世界、社会の必要に応え仕えること―

司祭 グレース 神崎 和子

昨年開かれました2012年日本聖公会宣教協議会「いのち、尊厳限りないもの」―宣教する共同体のありようを求めて―において、「日本聖公会へ宣教・牧会の十年へ提言」として特に5つの項目があげられました。その中の『世界、社会の必要に応え仕えること〈ディアコニア〉』について考えてみたいと思います。

ディアコニア、このギリシヤ語の意味は、仕えること、奉仕、世話、援助などがあげられます。ではこの「ディアコニア」を私たちの目線で捉えていくと、それはどのような事柄を示しているのでしょうか。

「ディアコニア」仕えること、それは勿論教会内において困難な状況に置かれている兄弟姉妹に寄り添い、力づけ、彼らの痛みを共有するこ

とにあります。そしてまた「ディアコニア」は同時に広く、地域や社会に向けて視点を広げて

仕えていくことを意味します。主イエス・キリストが人々を愛され、癒され、仕えられた様にも、私たちが外にむいて教会を開き、社会の周縁に

追いやられた人々、苦難の中にあつてやつとの思いで、小さな叫びを上げている人々と出会い、仕えることです。



2012年9月・日本聖公会宣教協議会東京教区参加者

それらの人々の必要に応え、仕える働きにはどのようなものがあるのでしょうか。私たちの周りにも、耳を澄ませば、色々な声が届いてきます。たとえば東日本大震災の被災者の方々、特に福島第一原発事故により東京に避難

して来られた方々の声です。放射能汚染が激しい地域では、避難したまま帰ることもできない母子が

たくさんおられ、その多くの家族が離散の状況に置かれています。このような何時帰れると

も分からない、先の見えない不安の中で、私たちの近くに避難して来られているのです。それらの方々が教会に集

い、語り合い、自ら問題解決にあたる事が出来るよう寄り添い、祈り、仕える活動を行なっている教会があります。

またそれぞれの教会の置かれている地域の中で、たとえば住宅地にある教会は、核家族の中で孤立感を深める母親たちの、息抜きの場、交流の場、癒しの場を提供し、心を通わせ、必要とされることに応えていこうとしています。そのような日常的な小さな活動も「ディアコニア」であると思います。

私たちはイエスがなされたように、隙間に置かれた人々、痛みや悲しみの中にある人々、孤独の中にある人々に向き合い、彼らの求めること、必要とすることに応え、仕えることを、イエスに促されているのです。

それぞれの教会に与えられている「宝物」を大切に育てながら、それをを用いて、人々に仕えていくことが私たちに託されていると信じます。



今回の特集は、第2回世界聖公会平和協議会での植松誠主教の開会説教と青年スチュワードとして参加された香山由希さんの感想を載せ、この夏、平和について考える機会としていただきたいと思います。

第2回世界聖公会平和協議会 開会礼拝説教

日本聖公会首座主教・北海道教区主教
ナタナエル 植松 誠

開会礼拝の説教として、私の平和への巡礼の歩みに決定的な影響を与えた出来事をお話しさせていただきます。

私が大学卒業後、アメリカに留学したとき、オクラホマ州にある小さな町の教会に行っていました。その教会に日本人が来たのは私が初めてで、何か歓迎されない、冷やかな感じがありました。その教会のシニア・ワーズン（信徒長）が戦時中、日本軍に捕らえられ捕虜収容所でひどい虐待を受けた元空軍将校だったからです。彼の名はロバートといい、その時の経験から日本も日本人も大嫌いだということを知っていました。ロバートはシニア・ワーズンですので、信徒たちが仲良くしたいと思っても、彼に気兼ねしているのです。それでも、彼に気兼ねしているうち解けてきましたが、ロバートとは4年間「グッドモーニング、グッバイ」だけでした。仕方のないことだと思いました。私は戦後生まれだし、彼の過



去の経験は気の毒ではあるけれど、私の責任ではないと思っていました。やがて日本にいた婚約者を呼び寄せ、向こうで結婚することになりました。私の両親も妻の両親も式に来ることはできませんでしたが、その時、ロバートが私のところに来て、尋ねました。「花嫁の両親は来るのか。来られないのだったら、僕が花嫁の腕をとって歩いてもいいだろうか」と。私は耳を疑いました。

結婚式当日、花嫁の腕をとって歩いてくる彼は大きく泣きました。それを見た教会の会衆も、皆泣き出してしまいました。彼の涙がどういふものか分かっていました。式が終わってロバートは私を抱きしめ言いました。

た「ナタナエル、今日、戦争が終わったよ」。そう言われたとき、私は自分の戦争責任を感じ始めました。今まで「いや違う。私もその中に生きているのだ」と。それ以来、ロバート夫妻はアメリカでの私たちの親代わりになりました。

結婚式でのロバートの涙の意味を私は考え続けました。彼が持っていた日本、日本人への憎しみ恨みは、もし教会で私と出会わなければ、生涯もち続けたでしょう。しかし私が彼の教会に行つたために、彼はシニア・ワーズンとしてどんなに苦しんだでしょうか。みんなの手本になるべき存在、熱心なクリスチャンでイエスの「汝の敵を愛せよ」も知っている。でも彼は私を赦せない、愛せない。4年間、彼はどんなに苦しんだことか、憎しみ、恨み、怒りが渦巻き、そこからの壮絶なまでの悔い改めと赦し、そして愛。

このことがあつて後、私は聖職者になりたいと思うようになり、神学校への道を歩み始めました。

私たちは今、平和と和解を求めてここに集まっています。そして、私たちには平和を得るために、様々な「権利」が与えられています。しかし権利というものはすべての人に平等に与えられないと思ひました。

ているものではありません。例えば、ここ沖縄においては、日本の国内でありながら、米軍の基地によって治外法権がまかりとおり、住民が与えられている様々な権利が奪われています。そのことに目を閉ざし、自分の権利だけを守ろうとするなら、いさかいが起り、不和が生まれ、それが国同士なら戦争になるでしょう。

平和を求めるとき、自分の権利だけを、自分の正義だけを主張し守ろうとするところに平和の実現はあり得ません。自分の権利を離し、人の権利を、或いは権利を持たされていない人々を守ろうとするとところに平和の種は時かれます。

主イエスは復活後、弟子たちに現れて「あなたがたに平和があるように」とおっしゃいました。その言葉は十字架上で神の子として、すべての権利を放棄されたが故に成し遂げられた究極の平和であったと思うのです。そして、その平和を弟子たち、私たちに与えられたはずですが、私たちは日々の小さな営みの中で痛みをもって自分の権利を捨てるとき、隣人、隣国、世界へと平和の連鎖が始まり、神の国の実現がなされるのではないのでしょうか。

(要約・広報委員会)

世界聖公会平和協議会に参加して

池袋聖公会 香山 由希

私は、今年の4月15〜22日の間、沖縄で開催された「第2回世界聖公会平和協議会」にスチュワードとして参加させていただきました。私の聖公会とのつながりは、生まれてすぐの時からなのですが、よく通っていたのは小学生の時くらいまでで、ここ5、6年は年に数回しか通っていませんでした。そんな私がなぜ今回参加しようと思ったのかというところ、ただ単に「沖縄」という言葉に惹かれたからです。正直に言うと最初は、安上がりで観光できる、くらいに思っていました。しかし、そんな下らない考えは初日に実行委員会の方々と会ってすぐになくなりました。私が今回の平和協議会に参加して一番感じたことは、その場で体験したこと、得たことを現地ですぐにフィードバックできることの大切さでした。今までの私は沖縄の歴史や最近の基地問題に関するニュースを首都圏で見ても、大変だったんだな、と思うだけで、深く「考える」ことをしてこな



かったことに気づいたので。なので、今回設けられたグループ討議の時間はこの一週間の中で、自分の中で最も価値のあるものとなりました。スチュワードの仕事は主に、講演で使う資料の整理や翻訳機の調整、会場の準備などで、特に翻訳機の調整は、日本人、韓国人、イングリッシュスピーカーの3種類用意しなくてはならず、ここまで多国籍な方々に接するのは初めてだったので、とても新鮮でしたし、自分の英語力のなさに驚きました。その場で通訳される方々の姿を近くで見ている心の底から感服いたしました。

17日にはバスで沖縄の戦跡と基地を見て回る事ができました。あいにく開催期間中のほとんどは雨模様で、バスの窓から見たものもありましたが、韓国人慰霊塔、県立平和祈念資料館などは実際に見学することができました。また、個人的には沖縄のことを外国の方と一緒に学ぶことができただけではなく、いろんな国の人が一緒に学ぶ、ということ自体に意味があ



また講演は、内藤新吾牧師、谷昌二主教の原発、軍事化の講演や柳時京司祭の韓半島分断状況(TOPIC)に関する講演など、本当に聞いてよかったと思うものばかりで、今も大卒の学びにとっても役立っています。全体を通して、人と人との「国を超えたつながり」をずっと感じながら過ごすことができました。また、このことがきっかけで英語、韓国語を勉強したり、聖公会ともっと関わりを持ちたいという気持ちにもなりました。まだまだ書き足りないところがたくさんあります。この経験は紛れもなく私の人生のターニングポイントのひとりとなりました。本当に、参加させていただきありがとうございました。

司祭と語ろう(その8)

司祭 大森 明彦

今回は、5月25日に結婚された浅草聖ヨハネ教会の大森明彦司祭に、信徒の伊藤裕元さんと柴田弘美さんからお話を伺っていました。

― 多分、広報でこの時期に大森司祭を取り上げるのは、ご結婚のことを聞いて欲しいということだと思えますので、まずは結婚式の感想から伺います。

大森 とにかく私は結婚式というの最初は初めてで…。



― それは分かってます。(笑)

大森 いや私がじゃなくて、牧師としてまだ1回も結婚式の司式をしたことがないという意味ですが。

― すみません。そうでしたか。大森 ですから、大勢の人に来ていただいたのは嬉しいのですが、何か照れくさいというのか、恥ずかしかったですね。

― 司式、説教など主様が3人も関わってくださって、本来なら主教座聖堂でなされた方が

よかったですと思うのですが。大森 私はヨハネで出来てよかったです。とくに聖婚式のために教会の人たちが設備をいろいろと整えてくれてとても感謝しています。

― ぶっちゃけ、お金はかかりました。(笑)

大森 有り難うございます。― 結婚を決心されるまでに悩みとかはありましたか。大森 いちばん思ったことは、家族がいると、今までのように身軽に動けなくなるかもしれないというこ

― 決心された経緯、直接の理由は何でしょうか。

大森 私がヨハネに来た後、八王子の教会の方から、せめて婚約だけはしなさいと言われて、結婚は十年後と思って婚約をしたのですが、「それはいけない」と主教と團長に怒られました。その後1月に常置委員長に食事に呼ばれて、その席で日程が5月25日に決まってしまう

― 今話を聞いてみると、周りから言われないと、結婚に踏みきれなかったようなお話しですが、実際は八王子と浅草に離れて、あらためて大切さを感じられたんじゃないですか。大森 そういうことかもしれない

― どうも本音は言いにくいみたいですね。新しいご家庭に対する希望、期待、目標などはありますか。

大森 お互いが今している仕事にプラスになればいいと思います。まあ少なくとも相手の邪魔にならないようにと。― 聖婚式にはお坊さんも見えましたが。

大森 人権委員会の関係で同宗連という14の宗教団体からなる会議に出ていますので、仏教、神道の人も交流があります。

― そもそもどうして教会に行くようになったのですか。大森 大学院時代にローマで一夏過ごした時にこんなことがありました。たまたまサン・カリストのカタコンベに寄ると、フランス人の神父さんに一緒に入ろうと誘われて私たちは3人で

「司祭のこの一冊」『聴く』ことの本質

― 臨床哲学試論―

鷲田清一 著 TBSブリタニカ 一九九九年

司祭 中川 英樹

「わたしはだれにとつての他者か。」今から14年前、ふと手に取った、鷲田清一の、この著の中に、この言葉を見つけたとき、それまでの未解という殻がパチンと弾けたようにおもえた。それは、人と人との「間」というものに関心を持ち、「間」には信頼や敬意、思いやりが生まれ、しかし同じ「間」に傷つきや憎しみ、不和の生まれることの「何故」をおもい巡らしながら、自分とは何か、他者とは何か、その未解の殻の固さに、もがいているときだった。



鷲田は言う。「自分とはなにかを問うても、自分はみえてこない。わたしは「なに」であるかを問うのではなく、わたしは「だれか」、つまり、だれにとつての特定の他者でありえている

かを問うても、自分はみえてこない。わたしは「なに」であるかを問うのではなく、わたしは「だれか」、つまり、だれにとつての特定の他者でありえている

か、を問うべきだ」と。自分がだれであるかは他者との関わりの中でしか見えてこない。鷲田の論者は深く、その著は難解で読みにくい。しかし、そこには常にユーモアと温かさがある。その後も、何冊も鷲田の著を読むが、いつも大きな示唆がわたしにはある。そして、彼の「わたしはだれにとつての他者か。」との臨床哲学の試みは今も彼の著の中で色褪せず、挑戦的だ。わたしはだれの、その人にとつて、どんな他者であろうとしているのか。また、わたしは、どんな他者として、その人の「だれ」となり得ているのか。わたしの側からではなく、他者の側から、わたしが「だれ」であるかを学ぶ大切をおもおう。この著に出会って14年もの月日が流れ、いくつもお会いを重ねながら、いまだ人と人との間で傷ついたり、傷ついたりしながら歩んでいたりする。また、はじめから、この本が読みたくなかった。

洞窟に入りました。カタコンベの中にはチャペルがあり、そこで神父さんがミサをあげたのです。その時、教会はこういうことをする所だったのかと初めて知りました。それで帰国したら、教会に行こうと思い、ギリシア語を習ったことのある森紀旦先生に、東西線沿線にある教会を紹介してほしいと手紙を書いたら、聖バルナバ教会を紹介され

― でもその時はまだ聖職になろうとは思っていませんでした。

大森 もちろんそうです。後になつて森主教から「君はいつか、教会のタメに働く人になると思っていた」と言われました。

― 聖職の道に進まれるようになったのは、どんなきっかけだったのでしょうか。大森 聖バルナバ教会に、加藤博道先生が赴任されて、「教会で働く気はないか」としばしば言われていたんですが、その時は断っていました。加藤先生がバルナバを離れてから私の祖母が死んで、その時に聖職志願を



クの減りが早いような気がするのですが、祈ることを大事にしていらっしゃる方という印象があります。

大森 祝日、小祝日にも聖餐式

― 先生がいましてからローソ

をしているからでしょう。ただ聖餐式だけが大切であるなら祈禱書の一番始めに聖餐式文を置いたはずですが、でも朝の礼拝、夕の礼拝で始まっているということは、聖公会が毎日の礼拝を大切にしていることを現していると思います。― 何かお祈りする時のこだわりとかありますか。大森 必ず地域のために祈る

8月6日は公会暦によると「主の変容貌」の祝日である。

イエス様が3人の弟子を連れて高い山に登られ、彼らの見ている前で、今まで見ていたイエス様の姿が消えて、白く輝いたお姿が現された。ペトロはイエス様を「神の子、メシヤ」と口では言ったが、実際は全く理解していなかった。エルサレムへの険しい道、十字架に懸り死んで蘇り、天に昇り神の右に座す、神の子の正体をはかり知ることが出来な

《聖書を開いて》⑨ 主イエスの変容貌

ルカによる福音書9・28～36

司祭 福澤 道夫

さて、この日はアメリカによって広島に原子爆弾が投下された日でもある。直接の死者20万とも言われているが、その後の死者、苦しむ生存被爆者の数を数字で表すことは不可能だ。「アウシュヴィツとヒロシマ原爆以後、神学は変わった。」と言われて久しいが、あの日から68年間、戦争の記憶も薄らぐ中、「核の平和利用」という言葉に慣らされて、原子力発電所をこれほど危険な代物とも深く考えなかった。

神の創造したものはすべて良きものだった。また祝福された世の終わりが約束されていたが、今や人は核兵器、核燃料を持ったが故に破壊の世の終わりをもちたそうとしているのである。これこそ、まさに人間の神への反逆である。核廃絶は神の声でもある。

私たちの教会 [7]

ようこそ阿佐ヶ谷聖ペテロ教会へ



♪♪阿佐ヶ谷駅のお近くに、楽しい教会がありました♪♪その名は聖ペテロ教会、八十年の歴史がある♪♪笑顔のあふれる教会だ♪♪子どもから大人まで♪♪大人まで一緒に祈りましょう♪♪夏にはキャンプで楽しんで、秋にはハザーもあるんだよ♪♪クリスマスには聖劇あり、なんとサンタもやってくる♪♪楽しい行事でいっぱい♪♪子供から大人まで一緒に楽しもう♪♪さあみんな、集まって、ペテロは楽しいよ♪♪

メロディーは「南の島のハメハメハ大王」を使った替え歌。歌詞のごとく阿佐ヶ谷聖ペテロ教会の応援歌です。作詞は今年の春、日曜学校を卒業したお嬢さんと、そのお姉さんとの合作。リリースされたのは忘れもしない2年前の夏のファミリーキャンプで、手づくりのペーパーサークル付きで披露してくれました。

歌詞にある通り交通の便の良い住宅地の一面にあり、かつてペテロで司牧されていた司祭の夫人はとにかく買い物に便利で、忘れ物してもすぐに買いに行けるのが嬉しいと言っておられました。でもペテロの良いところは交通の便だけではなく、ハードの面では入り口から中2階の礼拝堂へ、又地下

にあるホールへ階段ではなくスロープで結ばれているので、車いすでの移動が可能。もちろん車いす仕様のトイレも完備しています。二つ目は礼拝堂の音響の良さです。おおむね礼拝堂は天井が高いので音響が良いのですが、日常の礼拝では気がつかないこと。20年程の歴史のある阿佐ヶ谷駅周辺を舞台とした阿佐ヶ谷ジャズストリートの公式会場となったことがきっかけです。

他方ソフト面では幅広い人材でしょう。一昨年の宣教協議会前のアンケートによると、ペテロの宝は、一人ひとりの賜物が受け容れられ、生かされている。日曜学校が大切にされている。オーガニスト奉仕者が多い。年齢に関係なく話し合える楽しい雰囲気がある、等々。例えばアコライトは13歳から68歳と幅広く、合計9名で奉仕しています。目下新1年生をリクルートしようという攻め法を練っているところ。また聖職者の減少を考えると、聖職を目指す人材の発掘と共に、現在ペテロにはいない信徒奉仕者の育成が急務かもしれません。

最後に歴史に触れておきま

す。1953年11月号の東京教区時報の教会巡りの一部を引用すると、「大正14年の創立といえは本月で28歳と9カ月、教区の中でも比較的若い方だが、それに比例して信徒の平均年齢も相当若い。それもそのはず、メンバーの大半が戦後受洗した若者達によって占められているのだから。一昨年、主任司祭の栗飯原師が療養中、その頃は数多くなかったメンバーが、親命の留守中は我らでと大いに奮闘したことが効を奏し、親が無くとも子は育つと云うか、若手信徒が急激に増加した。最近話題を賑わした信徒伝道の先駆を行っていた観がある。これも戦災教会の一つ。それを復興するに当たり、建堂式の7月10日に最も近い日の聖徒の名をとって、聖ペテロと名づけたもの。」

それから半世紀以上立ち、今年には創立88周年。幸いに主教巡回日となった先日6月30日に祝うことができました。これから伝道を支える中心の世代はどこでしょうか？いやどの世代も自身の賜物を磨いていくのが正解のように思われます。

阿佐ヶ谷聖ペテロ教会・前島恵

《信徒リレーエッセイ》
祈りの場に
東京聖三一教会 東 理夫

カナダの日系人の教会の牧師だった祖父は、戦後日本に帰ってきてからは祈る人だった。明け切らぬうちに家を出て、近所の墓地で祈り続けていた。近くにある教会には、行くこともしなかった。

教会は祈るためにある、とぼくは信じている。一人ひとりが自らの祈りを捧げる場所だと信じている。しかし、祈るだけではないのか、と思ひ悩む自分もいる。その祈る場所を確保し、継続していくために祈る以外のことも必要なことがあるのではないか、と思ひ悩む。

教会は今、下り坂にあるのではないのかという思いを拭いきれない。一人でも多くの人を、教会へと足を運ばせたい。そのために敷居を低くしたい。そう考えながらも、ただ悩む。

家の近くの墓地の片隅で、ひたすら祈っている祖父を見たことがあった。その背中は自信ありげで揺るぎがなく、しかしたとえようもなく孤独そうだった。

心が高くあげよ
―神にゆるされ導かれた
90年を礎として―
フェスティバル委員長
司祭 山口 千壽

今年の教区フェスティバルは標題のテーマを掲げて行なうことになりました。

今年、教区成立90周年の記念の年です。1923年5月17日に、東京教区は元田作之進主教を初代監督（主教）として選び、日本人が管轄する教区として、大阪教区とともに成立しました。

また、午後にはイベントを計画していますが、礼拝とのつながりを考慮したプログラムが練られています。各教会、諸団

した。そこで、今年の教区フェスティバルは、過去の歩みを振り返り、そして10年後に迎える100周年に目を向けて、感謝と賛美の礼拝を捧げたいと思います。子どもから大人まで、大きな家族として共に集まり、これまでの主の導きを感謝し、心を新たにされて、新たな歩みを踏み出す機会にしたいと願っています。

また昭和になつて軍国主義、国家主義の台頭に伴い厳しい弾圧を受け、聖公会は一つの教団として存立を維持す

められています。

90年の歴史の中で、東京教区は幾多の困難に直面して来ました。教区成立の年には関東大震災が起こり、多くの教会が焼失しました。「凡ては失せたり、残るは主にある信仰のみ」とマキム主教は米本国に打電し、灰燼の中から立ち上がらせてくださる主への信仰によって希望の光を仰ぎました。

芝公園の窓から⑤

キリスト者として生きて行く時、本気で主に従って行こうとする時、常に覚悟と決断が問われる。昔聞いた話だが、朝鮮戦争中、共産軍によって韓国の教会が迫害を受けた時の話であるという説もあり、昔南米で軍部独裁政権に対して抵抗したカトリック教会の話であるという説もある。

ある日曜日いつものように教会にはたくさんの人が集まって聖餐式が始まった。怪しい男2人の新来者があった。皆は気にしないで礼拝をささげていた。感謝聖別の時、怪しい男2人がコートの中から銃を出し、1人は入り口の前に立ち1人は礼拝堂の前に出て言った。「イエスのために銃に撃たれる覚悟をしている人以外は早く教会から出て行け！」怖くなって怯える人々はあつという間に礼拝堂から出た。わずか数人と司祭だけが教会に残った。男たちは銃を下ろして静かに司祭に話をかける。「偽善者たちは去っていきました。これから本気で聖餐式をささげましょう！」

私たちはこのような時代に生きているわけではないが、日常生活においてイエス様に従っていく覚悟が求められている。今イエス様は私たちに語っておられる。「わたしに従うと言っているあなたの覚悟と決断は本気なのか」と。

(宣教主事 司祭 卓 志雄)

東京教区
2013 フェスティバル
心高くあげよ
教区成立90周年
心高くあげよ
日にゆるされ導かれた90年を礎として

日時:9月23日(月曜日・秋分の日)
午前10時30分～聖餐式
午後1時30分～バザールとイベント
午後5時～夕の礼拝(カコーン・ソング・セレモニー)

場所:香蘭女学校
東京都上野一丁目町7番地の1(有明/下町 徒歩5分)
〒112-0064 東京都荒川区南5丁目2番21号
香蘭女学校(有明駅西口徒歩10分・有明駅西口徒歩10分)

お問い合わせ:東京教区事務局 03(3433)9987

体からの出店もバザールを盛り上げてくれるものと期待しています。賑やかに、そして交わりを深めるひとときになるよう準備が進められています。そして、心静かに祈る時を大事にして閉じたいと思います。

また、記念誌の発行の準備も各教会・団体のご協力を得て、着々と進められています。

90年の歴史の中で、東京教区は幾多の困難に直面して来ました。教区成立の年には関東大震災が起こり、多くの教会が焼失しました。「凡ては失せたり、残るは主にある信仰のみ」とマキム主教は米本国に打電し、灰燼の中から立ち上がらせてくださる主への信仰によって希望の光を仰ぎました。

また昭和になつて軍国主義、国家主義の台頭に伴い厳しい弾圧を受け、聖公会は一つの教団として存立を維持す

ることができませんでした。試練の中にあつた信仰の先輩たちの苦悩はいかばかりであつたでしょうか。「エクレジア・カトリケーのために闘いし わが戦いはここにはてしなく(須貝止主教)。そのことを十分踏まえた上で、しかし、教会は預言者としての信仰に立って、その使命を十分に果たし得たか、謙虚に省みること、この機会にしなければなりません。

また、現状を改めて顧みるまでもなく、信徒の高齢化、聖職の減少、財政の逼迫等の問題が目の前に迫って来ています。明るい材料が乏しく、前途多難に思えますが、それだからこそ、心が高く上げましょう。このフェスティバルで主による希望の道が示され、未来に向けての東京教区の着実な歩みがスタートすることを期待したいと思います。9月23日に香蘭女学校でお会いしましょう。

つきしまキッズデイ

聖公会東京311

ボランティアチーム

楡原 民住

■大震災から2年経った今も、都内に8875人が避難してお

り(6月6日現在、東京都発表)、その内の7274人は福島県からの避難者であり、「自主避難」と呼ばれる母子が多く含まれています。その母子たちは、東京電力福島第一原発の爆発事故により避難を余儀なくされたにもかかわらず、「区域外」のために補償も殆ど受けられず、経済的にも精神的にも苦しい避難生活を強いられています。

■避難から数か月後には、嘆き、苦悩の声があちこちで聞かれました。「幼稚園にも行けず、小学校も何度も転校、子どもが不安定」、「子どもを思い切り遊ばせてあげる場所がない」、「夫は福島、知らない所での独りの育児は辛

い」、「同じように避難しているママたちに会いたい、話したい」この思いを受け止める形で「つ



つきしまキッズデイ」が2012年1月に始まりました。 ■「つきしまキッズデイ」に決められた遊びはありません。子どもたちは自分のしたいことを自由に存分に楽しみます。 ママたちは、教会ホールのお茶サロンで過ごします。「久しぶりにみんなに会えた」、「同じ町から避難しているママに出会えた」、「今日初めて避難ママに会えた。友だちができてうれしい」、「辛かった時のこと、みんなで話せた。やっと泣けた」、「ここに来ると福島に戻ったような気がする。ここは福島のことばで話せる場所」といった声が寄せられています。

■「つきしまキッズデイ」が最も大切に行っていることは、「ここはゲスト(避難母子)のもの」、私たちが何かをしてあげる場所ではなく、ゲストがしたいことができる場所だということです。

です。また、「放射能がうつる」、「福島に帰れ」、「自主避難のくせに」等、東京で冷たい言葉



や無関心に晒されてきた母子たちが、ひと時だけでも不安なく過ごせるように、保育士や幼稚園教諭等の専門職と顔なじみの大人、中高大生ボランティアによつて子どもたちを守り、お茶サロンはゲストだけの空間になっています。

また要望に応えて、法律や医療健康相談、マッサージなどの機会を提供しています。

■子どもたちは今、水遊び、どろんこあそびに夢中です。みんな大きくなりました。

ママたちは、始めた頃よりも明るく元気になったように見えますが、笑顔の向こうに、心も身体もぎりぎり頑張っている姿と涙

が見えます。

先の見えない避難生活が続く限り、私たちも、つないだ手を離すことはできません。

■福島の子どもの楽しそうな声が園庭に響き、ママたちの笑顔がホールにあふれる時、月島の教会も保育園も私たちも、喜びにあふれます。

この1年半、移りゆく季節を共に過ごし、子どもたちの成長を共に見守ってきた「つきしまキッズデイ」は、2度目の夏を迎えました。

迎えました。

「つきしまキッズデイ」

東日本大震災および福島第一原発事故のために、首都圏への避難を余儀なくされた子どもたちと家族のためのプログラム。毎月一回日曜日の午後開催。共催/月島聖公会、社会福祉法人ひかりの子、聖公会東京311ボランティアチーム。協力/GFS・賛育会病院・東京災害支援ネット・きらきら星ネット。また、東京教区支援対策本部の協力を頂いている。

次回秋号 10月20日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア (八)

1. 説教の録音

信徒「先生、ずっと説教を録音しているのですが、今度の日曜日教会に行けませんので、録音しておいていただけませんか」

牧師「私の説教を、ずっと録音しているのですか?」

信徒「そうです」

牧師「だったらその必要はありません」

信徒「どうしてですか」

牧師「3年前に録音したものを聞いてください。同じですから」

2. ぜんのうの神?

牧師「神さまの恵みは、いつも人の思いとか行為に先立って与えられています」

信徒「それで“ぜんのうの神”と言うんですね」

牧師「どういうことですか」

信徒「だって、神さまの恵みはいつだって前払いという意味で“前納”です」

3. 牧師になる覚悟

信徒「先生、牧師になるためにはどんな覚悟が必要でしょうか」

牧師「そうだなあ、弟子たちのように神の前にすべてを捨てる覚悟かな」

信徒「すべてというのは、家族とか財産のことですか」

牧師「もちろん、それも含まれるよ」

信徒「そうですか、すべてというのは無理ですが、とりあえず・・・」

牧師「とりあえず、何ですか」

信徒「とりあえず、妻だけは今すぐ捨てる覚悟があります」